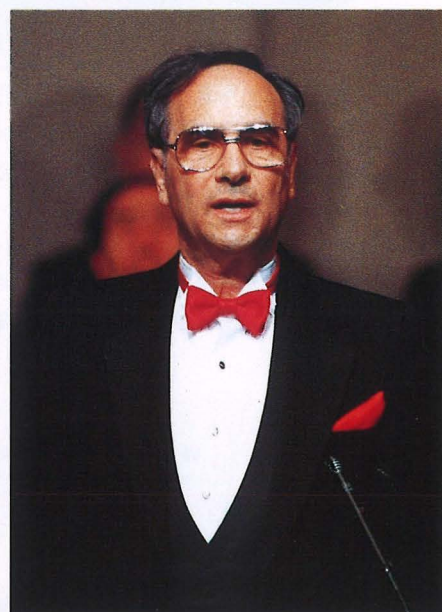
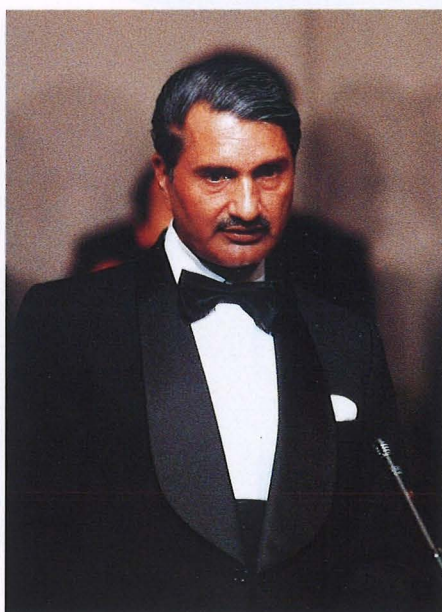


JAPAN PRIZE NEWS

1987年7月 No.4



1987年(第3回)受賞者は米国、インドの3博士 多収穫稲への改良と世界初のレーザー発振



国立劇場で行なわれた1987年「日本国際賞」授賞式で、受賞の感激と喜びのスピーチをするビーチェル博士(左)、クッシュ博士(中)、メイマン博士(右)。

日本国際科学技術財団が、世界の科学技術の進歩に著しく貢献した功績者に贈る、「日本国際賞」の1987年の授賞式が、4月14日、東京の国立劇場で行なわれました。

今回の受賞者は、国際稲研究所(IRRI)を中心にして稲の品種改良の研究を展開、熱帯、亜熱帯地方でも多収穫になる稲の新品種の「IR8」や「IR36」の育成に成功した同研究所の前稲育種部長のヘンリー・M・ビーチェル博士(米)、現部長のグルデブ・S・クッシュ博士(印)、さらにルビーを使って、世界で初めてレーザー発振の実現に成功したセオドア・H・メイマン博士(米)の3人。

ビーチェル、クッシュ両博士は、コメの生産と安定の自給達成に大きな役割を果たし、発展途上国の食糧危機を救いました。

また、メイマン博士は、光通信やレーザー医学など今日の目まぐるしいレーザー科学発展の先駆者の役割を果たしました。

授賞式は、皇太子殿下ご夫妻をお迎えし、矢口洪一最高裁判所長官、在日各国大使、各界の学者、研究者ら約1,300人が出席して行なわれました。



授賞式は、皇太子殿下ご夫妻をお迎えし、1,300人の出席者の中で、厳粛に行なわれました。

21世紀へ飛躍する独創的研究成果



「人類全体の幸福のために」 皇太子殿下がお言葉

授賞式では、横田喜三郎理事長の挨拶のあと、審査結果の報告と授賞理由の説明があり、財団の松下幸之助会長から賞牌と賞金5,000万円(2人授賞の場合は各2,500万円)の目録が3人の受賞者に手渡されました。このあと、皇太子殿下が3博士の業績を讃えられ、次のようなお祝いの言葉を述べられました。

3人の受賞者は、東京永田町の総理大臣官邸を表敬訪問し、中曽根首相に受賞の喜びを述べるとともに「今後も科学技術の発展に少しでも寄与していきたい」と語りました。

これに対し中曽根首相は「人類の究極の目的である平和の実現と、科学技術の飛躍のため皆さんの一層の活躍を期待しています」と激励しました。



「次世代の研究者の育成に」 「レーザーを医学の発展に」

記者会見で今後の抱負を語る

3人の受賞者は、内外の報道関係者と記者会見、受賞の喜びと今後の研究の抱負を語りました。

この中で、ビーチェル博士は「稲の品種改良の研究には、まだまだ課題が多くあるので、今後も意欲的に取り組んでいきます」と語り、クッシュ博士は「次世代の研究者を育成するため、奨学基金を設立したり学校を援助していきたい」と語りました。

また、メイマン博士は「今後は特に、レーザーを医療に応用する研究に取り組み、病気の治療と予防医学の発展に、少しでも役立ちたいと思う」と述べました。

皇太子殿下のお祝いの言葉

「科学技術の進歩には目覚ましいものがありますが、これを人類全体の幸福のために用いるよう常に心していかなければなりません。この度の3博士の業績は、この意味の科学技術の成果を示すものと言えます」



また、3博士は、東京都の鈴木知事を表敬訪問しました。鈴木知事は、3人の受賞者にお祝いの言葉を述べ、記念品を手渡しました。

平和への貢献と業績を称える祝宴



ビーチェル、クッシュ、メイマン博士の受賞を讃える祝宴は、皇太子殿下ご夫妻をはじめ三ツ林科学技術庁長官、塩川文部大臣、加藤農林水産大臣、文化勲章受賞者、在日各国大使など500人にのぼる来賓を迎え、4月14日午後7時から、ホテル・ニューオータニで開かれました。

宴たけなわになったところで、メイマン博士の業績を記念してレーザー・ショーが上演され、また、ビーチェル、クッシュ両博士の業績を記念して、品種改良米によるピラフ風のオリエンタルライスが出され、祝宴を一層盛り上げました。



なごやかな雰囲気の中で乾杯が行なわれ、3人の研究成果を讃える祝辞が続きました。



祝宴が終わったあと、皇太子殿下ご夫妻は親しく受賞者をご歓談になり、苦労を重ねてきた研究生活に、ねぎらいの言葉をかけられました。



感銘を与えた記念講演会

授賞式や表敬訪問、大使館主催のレセプションなど公式行事のあと、東京有楽町の朝日ホールと京都の国立京都国際会館で3人の博士の記念講演会が開かれました。

3博士は、受賞の対象となった研究の苦労話や、独創的アイデアを成果に結びつけていった過程を披露し、会場を埋めた大勢の聴衆に深い感銘を与えました。

また3博士は、東京、京都での学術懇談会にも出席、日本の代表的な専門家と研究テーマについて熱心に意見交換を行ないました。



受賞者を祝し、アメリカ、インド両大使館が主催してレセプションが開かれました。

3人の受賞者は、公式行事の合間をぬって京都見物を楽しみました。

真々庵では日本庭園に感嘆の声をあげ、京都の春を満喫しました。

受賞者の業績やプロフィール、授賞式の厳粛な模様は、新聞、テレビ、雑誌などを通じて内外に大きく報道されました。



東京・浅草の雷門を訪れ、江戸情緒に触れながら、楽しいひとときを過ごしました。



1987年 受賞者の決定まで

●1987年「日本国際賞」の授賞対象となった「生物改良」と「エレクトロ・オプティクス」の分野の受賞候補者推薦の依頼状は、'86年3月、世界86か国の著名な学者ら9,313人に郵送されました。

その結果、日本を始め世界29か国から、生物改良分野233件、エレクトロ・オプティクス分野259件、その他18件の合計510件(うち日本から98件)の推薦書が送られてきました。

財団は、両分野の権威者27人からなる審査委員会を組織。調査、検討を重ねて厳正な選考を行なった結果、今回受賞した米国、インドの3人の研究者を選出しました。

406件の推薦出揃う—1988年受賞者の選考始まる

●来年4月に予定されている1988年「日本国際賞」の授賞対象分野は「エネルギー技術」と「予防医学」の2つの分野に決まりました。

エネルギー技術の研究は、人類の未来の幸福と平和を担ったテーマであり、技術革新の時代の中で目覚ましい進展をしています。

研究対象はエネルギーの生産、貯蔵、変換、伝送、消費などにとどまらず、核分裂、核融合、太陽熱、風力、潮力、波力、地熱、省エネルギーに関する分野も含まれています。

一方、予防医学の研究も、人類の永遠のテーマである健康に関するものだけに、近年、裾野が大きく広がってきています。

研究対象は、病原微生物から体を守る研究や代謝異常、老化、ガン予防を始め、病原体の発見、発病機序の解明などに大きく貢献した業績も含まれます。

すでに、受賞候補者の推薦依頼状約1万通が世界各国の推薦有資格者に発送され、これまで、406件が推薦されてきました。

現在、審査委員会が設置され厳正な選考作業に入っております。

●また、2年後の1989年「日本国際賞」の授賞対象分野を決定する分野検討委員会が、早くもスタートを切りました。急速に進展している科学技術の中で、どんな授賞対象分野が決定されるのか、各界から注目を集めています。